ルツェルン夏の音楽祭

スイスの夏の音楽祭について、今月は8月16日から9月15日まで「権力」というテーマで開催されたルツェルン音楽祭に触れたい。クライマックスはテオドール・クルレンツィスのダ・ポンテ3部作（演奏会形式）がプログラミングされたが（単独レポート参照）、ベルナルト・ハイティンクが「1年以上の長期休暇を取る前の最後の出演」がルツェルン音楽祭だというニュースが流れ、実質上の「引退コンサート」になるだろう、と話題をさらった。他にも、日本人ソプラノ角田裕子とピアニスト菅原幸子のリサイタルをはじめ、興味深いプログラムは多いのだが、ここではマウリツィオ・ポリーニのマチネを取り上げたい。ベートーヴェンをライフワークの一つにしてきた彼が、生誕250周年に向けて、ベートーヴェン・プロジェクトを始動したからだ。

ブラームス「3つの間奏曲」op117の第1番で素朴に始めたポリーニは、第2番で即メランコリックな音に変え、第3番は哲学的にと、一気に弾き終えた。身体中がピアノと同化して、ポリーニの存在そのものが詩的だ。そんな夢から醒めるように、ルイジ・ノーノ《苦悩に満ちながらも晴朗な波》で現実の世界を描く。聴衆はすでに数人が立ち上がり、現実的なポリーニも受容する。後半はベートーヴェンの二つの最後のソナタで、前半の二つの世界の中間を漂う。最後の長調への転調で生への希求を感じさせた「第31番」op110、しかし「第32番」op111では、すでに天上に転生しているかのような表現を聴かせて、スタンディング・オヴェイションで迎えられた。ポリーニ自身の、ピアニスト人生の集大成のようなベートーヴェン・プロジェクトになりそうだ。

チューリヒ歌劇場の新シーズン開幕

第1回Oper! Awardの「ベスト歌劇場」賞を授賞されたチューリヒ歌劇場は、その授賞式と同日の9月21日、オープニング・フェスティヴァルで新シーズンを開けた。オーケストラ稽古やドレス・リハーサルを見学したり、コンサートや広場でダンサーと一緒に踊ったりなどのイヴェントが散りばめられ、楽しい土曜日となった。その翌日、ヤコブ・フルシャ指揮、ディミトリ・チェルニャコフ演出、ヤナーチェク作曲の《マクロプーロス事件》で芸術的にも開幕した。美しいオーケストラと、すべての歌手が実力派の声を誇った。チェルニャコフの演出は、謎だった部分が最後に、「すべてはテレビのトーク・ショーだ」と解って解決するが、疑問も残る。それ以外は、スリリングで楽しめた。エヴェリン・ヘルリツィウスは、いつもの「強靭な声」以外にも、演者としても好演し、当たり役のヒロインだった。それに負けない豊満な声で初役のクリスタを歌ったデニズ・ウズン、グレゴール初役のサム・ファーネス、ヴィテークのケヴィン・コナー、プルス親子のスコット・ヘンドリックスとスペンサー・ラングなど、歌手全員がすばらしかったのは、フルシャの力も大きいだろう。難解に聴こえるヤナーチェクの音楽をときには美しく、ときには威圧的に鳴らしたが、不可解に響くところはなかった。チェコ人による自国オペラがスイスで観られるのは、やはり貴重な体験だった。

まだまだその力は健在、ゲオルギュー ©中 東生

翌23日はアンジェラ・ゲオルギューのリサイタルを聴いた。ピアノ伴奏はジェフ・コーエンで、エスコート役も上手くこなした。ラモーから始まるプログラムは、音楽学校の受験生でも歌えるような歌曲が多く、譜面台にしがみつく姿は不安を感じさせた。調も中声用を使用し、高音が出なくなっているのかと案じさせたが、長い息のコントロールは確実だ。ショパン《別れの歌》でようやく芸術と呼べる歌唱が始まり、イタリア歌曲に移ると演技でうまく乗り切った。前半はラフマニノフ《春の奔流》で終わったが、後半はより調子を出し、レスピーギ《霧》で本領発揮。その後は祖国ルーマニアの曲に移り、ようやく譜面台から離れた。R・シュトラウス《朝》をどう歌うのか楽しみだったが、シューベルト「セレナード」に代わっていた。しかし高い芸術性を見せた後、フロトー《マルタ》から〈夏の終わりのばら〉をイタリア語で歌い、最後はマイケル・ウィリアム・バルフ《ボヘミアの娘》から〈I dreamt I dwelt in marble halls〉を歌い、全プログラムを終えた。実はこの後が真の挑戦で、アンコールでプッチーニ《ジャンニ・スキッキ》そしてチレア《アドリアーナ・ルクヴルール》まで歌うとは思わなかった。総じて低音は音程が下がり気味だが、中音から高音にかけてのコントロールはまだまだすばらしい。しかし二点A（ラ）以上が辛そうで、オペラ出演ではカヴァーするのが難しいかもしれない。スター的なステージマナーで、上手に場を盛り上げ、成功を手にした。

チューリヒで活躍するピアニスト津田理子

チューリヒで日本人音楽家というとまず名前の挙がるピアニスト津田理子が8月23日にリサイタル、30日にはピアノ四重奏団でその円熟を聴かせた。10月はトーンハレでベートーヴェン・マチネに出演後、19日には日本でのリサイタル40周年マチネをトッパンホールで開く。